

みどり色の器

古代平塚の緑釉陶器

2014年8月21日(木)～9月3日(水) 平塚市博物館・平塚市社会教育課 共催

緑釉陶器(りよくゆうとうぎ)は、主に9世紀～11世紀前半頃まで日本で生産され、流通した陶器で、鉛を主体とした釉薬が掛けられていることから、淡緑から濃緑に発色していることが特徴です。

緑釉を掛けた焼き物自体は、7世紀後半の棺台や、8世紀の瓦などがありますが、本格的に陶器を焼き始めたのは9世紀の頃からで、当時の都であった京都周辺(洛北、洛西)が早く、更に愛知県猿投(さなげ)窯や尾北窯、東三河地方の二川窯、岐阜県東濃地方、滋賀県近江地方、山口県長門窯などが知られています。一般の土師器、須恵器などの焼き物と比べて高級な焼き物で、特に猿投窯で焼かれたものは優品が知られ、京都府京都市の冷泉院では猿投窯産の優品が出土しています。こうした高級な陶器であることから、当時の都である京都や、福岡県太宰府の周辺で多量に出土することが知られ、関東での出土は比較的少ないとされてきました。

しかし、平塚市では特に国府のあった四之宮周辺で古くから緑釉陶器が多く出土することが知られ、近年行われた湘南新道に伴う発掘調査では、全国的にも有数な出土量を誇ることが明らかにされました。出土した緑釉陶器の大半が愛知県猿投窯産であることがわかっていますが、こうした大量の緑釉陶器がなぜ平塚市にもたらされたのでしょうか。この理由については最近、奈良国立文化財研究所の尾野善裕先生が新説を発表され、8月30日に行われる「第3回平塚市遺跡調査・研究発表会」で講演をお願いしているので、お話を聞いてみてください。

この展示会では、市内から出土した緑釉陶器のほんの一部ですが、ぜひ一見され、平安時代の「華」に思いをはせていただきたいと思います。

第3回平塚市遺跡調査・研究発表会

日時：平成26年8月30日(土) 11:00～16:50

会場：平塚市教育会館 3階 大会議室

参加：参加自由 入場無料